



¡MÉXICO MÁXICO!

メヒコ マヒコ - 魅惑の国メキシコ - abr. 2018



【Vol.8】ハカラダの春&オレンジ色の経済

至る所で華やかに咲き誇ります



春の訪れハカラダ

シティでは今、“メキシコの桜”と呼ばれるハカラダ(Jacarandas)の花が満開です。朝の通学時、まだ掃除される前の道にスミレ色の花びらが一面に落ちて、絨毯のようになっているのを見るのが楽しみな今日この頃。

実はこのハカラダ、日本と縁の深いエピソードがあります。1930年、友好の印に桜の木を植えたいと日本へ提案したメキシコ政府。ですが、残念ながら気候的に桜の花が開花しないことが判明します。そこで、当時シティに移住していた造園家 松本辰五郎が、メキシコの乾燥した気候でも育つハカラダの植樹を代替案として提案

しました。ブラジル原産のハカラダはラテンアメリカ地域でよく育つ樹木で、彼の狙い通り、乾季の今ちょうど見頃を迎えています。公共の場での飲酒が御法度のメキシコでは花見酒は難しいですが、カフェのテラス席でクラフトビールを傾けながら日墨友好史に思いを馳せてみるのも渋い過ごし方です。

最近スケジュールや課題に追われ完全にキャパオーバー、体調を崩したことで、文化遺産マネジメントを学ぶ前に、まず自分のマネジメントをきちんとしようと反省しました。せっかくの春、ときにはPC画面から顔を上げて季節の移ろいに目を向けたいと思った早春です。



独立記念塔から望むレフォルマ通り

一番のギャップ?ランチタイム

よくメキシコのコンビニや雑貨店では小袋のポテチやお菓子が売られているのですが、常々“小さすぎて全然足りないのでは…!”と不思議に思っていました。しかし最近、メキシコ人と過ごすなかで理にかなっていることを理解しました。例えば、ある日は9~15時で授業があるのですが、ランチタイムはなく、15分程度のコーヒータイムが2,3回挟まれるだけ。この時間で食事を摂るのはかなり厳しい...!ということで、手軽に買えるスナックや軽食で手早く済ませることになります。その際、上記の小袋スナックは量的にちょうど良いサイズということがわかりました。

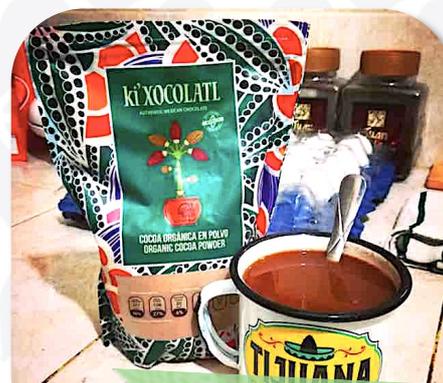
メキシコの食事時間は日本とは全く異なり、特にランチタイムは14~16時が一般的。

授業初日、12時からお昼休みがあると思込んでいた私は、空腹のまま午後の授業を受けるといふなんとも悲しい経験をしましたので、メキシコへ渡航の際はぜひ食事時間にお気をつけください。レストランも、13時頃までは朝ごはんメニューです。

露店のタコスやチュロスなどの軽食が好きでよく食べるのですが、油物はちょっと重たいな~と思う日もある渡墨8ヶ月目。日本に比べてフルーツが格段に安く、オーガニック食材やヴィーガンメニューも充実しているメキシコなので、タコスの向こう側にも一歩踏み出してみたいと思います。



友人お薦めのバストラミビーフバゲット



頂き物のオーガニックココア

@テンプロ・マヨールの修復工房



文化遺産とくオレンジ色の経済

「保存管理のための戦略プラン」という授業が山場を迎えつつあります。この授業では、実際に経済学の先生の講義を受けつつ、博物館や美術館の市場価値を分析しています。日本でいう文化政策やアートマネジメントの分野に近い領域ですが、経済的な視点から芸術を語るのがまだタブーに近い日本に対し、メキシコでは限られた資産を最大限かつ長期的に保存するための有効な手段という位置づけで、文化産業の供給・消費動向のリサーチ抜きに文化の保存管理は不可能という認識です。

これまで、VRIO 分析と FODA(SWOT)分析、5 fuerzas de Porter(ファイブフォース分

析)を基にした構造分析をしてきましたが、最近取り組んだのが“オレンジ色の経済 (Economía Naranja)”です。初耳…！と思っていたら、じつは〈クリエイティブ経済/産業〉のことで、創造的なアイデアから雇用が生まれる可能性のある分野(芸術やデザイン・映画・建築 etc.)を指します。身近な例では、韓流ブームや日本のクールジャパンといった文化政策がこの概念を基にしています。

先日はヒアリングのため、テンプロ・マヨール遺跡の修復工房と、国立古銭博物館(通称 La Casa de Moneda)の収蔵庫へお邪魔させていただきました。日本では、他館の収蔵庫には絶対に入れない、自館でも常勤学芸員以外は立会いが必要だったりするほど厳しく管理されている区域なので、密かに胸躍る貴重な経験ができました。



@古銭博物館の収蔵庫

美味しそう…と思いながら受けた授業

古銭学から貝類学まで

材料組成の授業では、布を燃やして匂いを嗅いだり、テラコッタ粘土を捏ねたり、色々面白いことをしています。なかでも驚いたのは、古銭学(Numismático)や貝類学(Conquiliología)まで学んだこと。古銭学では実際に鑄造工程を見学し、貝類学では一枚貝(Univalvos)や二枚貝(Bivalvos)といったシーフードレストランで役立つような単語を覚えました。ほかにも製本の種類について学んでおり、これらは日本では考古学や海洋学、図書館学の一分野ですが、メキシコでは保存修復分野に含まれます。日本の美術・文化財分野ではなかなか学べないのでは？と思えるユニークな授業が続いている材料組成クラスの紹介でした。

保存倫理とプエブロ・マヒコ

伊勢神宮が、20年に1度の「式年遷宮」を理由に UNESCO の世界遺産へ登録していないように、文化遺産の保存に関する国際基準は、日本の文化財が持つ木造や自然素材といった性質とは相容れない状況でした。代わりに、国内の文化財保護法により保存活動が進められてきています。

一方メキシコでは、国際基準をベースにしなが、IMBA(国立美術研究所)、INAH(国立歴史人類学研究所)、UNAM の3機関によって保存管理が決定されます。〈プエブロ・マヒコ(El Programa de Pueblos Mágicos:魔法のように魅力的な街)〉は有名な保存プログラムのひとつで日本の文化財保護法に近い制度ですが、観光振興も兼ねているところが日本の保護法とは大きく違います。

温泉街テキスキアパンもプエブロ・マヒコ

